



TITLE:

Sunderlandの日本文明評

AUTHOR(S):

財部, 静治

CITATION:

財部, 静治. Sunderlandの日本文明評. 経済論叢 1921, 12(4): 638-647

ISSUE DATE:

1921-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127765>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號四第 卷二十第

行發日一月四年十正大

論叢

勞働資本協調方法としての利潤配分

法學博士 田島 錦治

需要曲線供給曲線及び價格曲線

法學博士 河上 肇

地方所得稅に於ける特別稅附加稅

法學博士 神戸 正雄

獨逸直接稅の變革

法學博士 小川郷太郎

植民地の財政政策

法學博士 山本美越乃

時論

農業銀行國營の必要

法學博士 河田 嗣郎

說苑

各國貿易概觀

法學士 小島昌太郎

雜錄

Sunderlandの日本文明評

法學博士 財部 靜治

明代の救濟制度

文學士 清水 泰次

雜 錄

Sunderland の日本文明評

財 部 靜 治

前の米國日本協會々長 Lindsay Russell の序言を載せし、文藝師、神學博士 Jabez T. Sunderland の一著書 Rising Japan は、元來最近の世界戰亂開始後、米國に於て一部の論客、特に對外主戰論者により、醸成又煽動せらるゝこと多かりし、日米開戰論の非なるを、駁撃するの趣旨により、本邦事情を米人に紹介するため、發行せられたる著書の一なるか、就中由來幾多の歐人は、亞細亞の民族を以て劣等視し、その世界文明に於ける地位は、視るに足るものなしとするか如き趣あり、久しく亞細亞に蒞むに、不思議なる横柄、否半は侮蔑を以てせること、果して事實に忠なる所以なるかとしつゝ、全編十五章中三章を費やして、

説き出せる日本文明評論は、決して深き研究として、推し得へきに非ずと雖も、眞面目に本邦文明の擁護扶植に、志す人々のため、多少參考材料たらしめ、得へきものあるか如くなるのみならず、自己を忘れ、西洋特に米國事情に、一も二もなく心酔する者のため、他山の石たらしめ得へきに似たり、以下少しく紹介せん。

一國の文野を卜するの諸目標として、人々により擧げらるゝものは、多くして區々たり得へきも、就中數種の目標又は標準を探ることに就きては、賢明なる判斷者の間、殆んど皆その賛成を見んと觀しつゝ、Sunderland は夫等目標を、一つ一つ數へ立て、本邦の事實に照して、評論する方法を選ひたり、かくて先づ(一)國民間に於ける公序、遵法、(二)國民の智能及教育、新聞雜誌圖書の普及、(三)政治的自由、(四)科學の進歩上、輾近文明の標準に照して、侮るへきものなきを説きおきつゝ、次に(五)美術に關して、評せる所興味あり、即ち本邦が一の美術國として秀いて、如何なる赤貧者、賤の夫

も、日常渡世の一部として、之を樂しむと評して曰く

日本人は唯物主義者の、一國民たりとは、米人間に普通なる、一印象たるに似たり、されど何んを知らん、之を唯心主義者の一國民と呼ぶは、遙かに眞理に庶幾しとすへきものあるを、その國民性に於けるこの特質は、幾多の仕方に現はる、そは萬民詩歌を好み、上は「兩陛下より」、下は賤か伏屋の日傭人足に至る迄、殆んど人毎に歌を讀まさるなきの、事實ともなりて現はるれどその徴證として最も鮮明なるは、惟ふに之を美術に求むへし、日本民族間に於けるか如く、治ねく上下を通し、美術本能、美術感情に富み、美を好みて絶えず之を享樂せるものは、世界中日本を措いて何處に之を搜し得へきか、疑はしきことたり。

と、かくて先づ本邦圖畫彩色術か、寫實的たらずして、著しく唯心的たり、畫家は自然を模寫せんとせずして、自然の精神を活躍せしめんと

努むることを擧げ、引いて日本畫の多くは、一流の大家によるものと雖も、科學的見地よりせんか、その大小及配景法上、不精密なるの嫌あるも、畫家は描寫の綿密を、機械的たりとして之を重んぜず、意圖する所寧ろ一層高尚、微妙又深玄にして、畫題たる景色事物の、精神又は精神的意義を、表明せんとすと説き、論して曰く。

日本畫は印象なり、かくてその含蓄せる意義により、人心を引く、日本大畫伯のなすか如く、數毫を揮ふのみにて、一の馬又は鳥を畫き出さんとする一畫家は、一の寫生家たり得へきに非ず、その想は神秘的意義象徴的着想よりなり、沈思默考の間に、かかる奇想を腦中に湧かしめんと欲す、從ひて日本畫は唯心家以外、何人によりても觀賞せらるゝを得ず。

と、かくてその特色を以てせば、歐洲繪畫に比肩せしむるに足れりとせり、畫を論して未だ書に及ばず、物足らざるの感を起さしむると共に

畫論として、大體論に過ぎず。雖も、その要を得たるに似たり。次に彫刻につきては、古希臘又は晩近伊太利に劣れりとするも、一流の作とすへきものなきに非ずとし、東大寺の大佛その他の數例を、舉げしに過ぎざるも、彫り物細工に至りては、木彫りにつきても、その他の材料によるものも、與に卓越せるものありとし、特に珊瑚の彫物に至りては、その緻密絶妙により、注意を惹くものあり、過去に於て殆んど全く伊太利に限られたる同工業も、數年内には日本に移るならんと、本邦同工藝の將來を祝福したり、又裝飾物としての金銀象眼細工は、日本人の古くより長せし所にして、その技巧は今日に至りても替れざるを説き、更に陶磁器、漆器、染織物及庭園術に就き、優れたる點あるを挙げ、唯建築術に至りては、明かに歐洲に劣り、かの古希臘の寺院、又は中世及近世のゴチック式建築、特に英佛兩國の大會堂に、比肩せしむべきもの全く存せざるも、尙華麗又天下一品視すべき建物は、特に寺院中に尠からずとし、かくて

之を結びて曰く、

日本に於ては美術を以て、縁遠き一公共事物たらしむるよりも、親しき一私事たらしむること。世界中その他殆んど何れの地にも、見ざるか如き程度に及ぶ、住居のためにも、日常生活に於ける歌舞のためにも、美術が重きをなすこと、本邦の如きは、虞らくは他の如何なる、民族にも存せず。

と、吾人は寧ろ晩近本邦下層民の間、生活の壓迫甚たしきかために、その人生觀も漸く唯物的に流れ、一面諸美術は富者の私する所となり、かくて所謂共樂的奢侈の振作、泰西に比し遙かに遜色あるの、弊なきやを疑ふものなるも、氏の評にも亦一面の眞理あるを想ふ。氏は次に、(一)諸産業を瞥見し、海運、造船、林業、鐵道郵便、電信、電話に就き、好意的略説をなすと共に、特に勞働周約により、科學的なる本邦農業か、大に進歩せるを讚賞し、本邦土壤の自然的肥度か、米國に比して勝れりと、なし得ざるに拘はらず、毎噓當り平均産額は、米國の三万

至四噓當り産額に、相當することを指摘せり。

次に(七)國民の衛生、清潔、保健に關しては、その住居に就きても、身體に就きても、清潔を重んずとし、特に東京市二千百戸の、風呂屋あり、日々之に入浴する者、五十萬人を下らず、その外相當の家には、何れも浴室の備へあり、全身浴の風呂なることを舉げたり我衛生法規醫學及醫術の進歩に就き、説ける所は兎も角とし、右の一點は大に注意すべきものあり、人浴の風習を、清淨潔齋に關する、我古來の國民的、信念と、結びつけて考ふることに、大なる意義ありと雖も、特に衛生的否一般に社會的見地より察する場合、入浴の風習及風呂屋は、研究の價值に富める題目たり、吾人は右の風習を以て、佛教の影響に歸せし、長沼文學士の所論を(日本の文明と佛教)一一頁以下參照)讀みて程經さる中に、右の所説に接し、特に興多きを思ふ。(近目入手せし興味深き著書、前東京帝國大學、海軍大學、高等商業學校講師 Arthur Lloyd, Every-Day Japan, Pop. ed. in P. 300 に於る、入浴により健康を助長するの數多きを説き

日本に遊へる幾多の世界漫遊者中、數人にては本邦隨處風呂桶の雛形を持歸り、之が用法を英國農村の勞働者及小雇者に、授けたりとせんか、それは英國民のために、一大恩惠を及ぼすことならんと斷言せり) 氏は次に(八)節制(特に飲酒の)に就きても、日本國民は長する所あるを説き、更に(九)犯罪に就きては、本邦普通犯罪率か、米國及大多數の歐洲諸國より低く、特に暴虐なる諸犯罪は、尠きこと鮮明なりとし、年殺人及自殺數か、合衆國にては人口九千五百人に付、一人の割合なるに、日本にては人口五萬三千人に付、一人の割合に過ぎることを舉げ、私刑によるか如き殘虐は、全く存せざることを附説せり、犯罪に關聯して、日本に於ける男女道德の標準は、低しとの評あるも、數基督教國の如く低きことなしとせり、假令は之を賣春婦の記錄備はれる、露國に比較するに、一九一二年ベトログラードのみにても、かゝる婦人五萬人ありしに、日本にては帝國一圓に亘り、四萬三千人ありしに過ぎず、之を首府東京のみにつきて見るに、僅かに六千五百人なり、而都の人口

略相如けるに、その差は斯くの如く著しとし、露國以外の諸國に比較するも、その弊害は歐米諸大都市の如く、著しからずとし、此點に關し同様な評論をなせし、*The White Peril in the Far East*の著者 Sidney L. Gulickの言をも引けり、更に私生率を引き、一九一二年中に於ける私生率、人口萬に付、日本にては九三に過ぎざるに、伊は九八、白は一一一、瑞典は二五、丁抹は二三三、洪は一五一、澳に至りては二三〇、即ちその割合日本に比して、約二倍半たるを擧げ、等しく男女道德低からざるの徴證に供し、別に又離婚數著しく多きも、こは必ずしも夫又は妻の不道德なるを證せず、寧ろ新婦か夫の両親と、共棲するの舊習による所多く、その慣習とても、今や漸次替れ行くことを説けり、計數の確否、計數により語らしめんとせるものの適否に關する、評論は兎に角とし、計數をかける評論に、採り入れたるの用意に至りては、之を嘉みすへし。次に(二〇)取引否一般人事上の、正直廉潔に就きては、米國に於て日本

人の惡評流布せられ、支那の大小商人及一般人民は、信賴され得へきも、日本にては國民を、確かとして信し兼ねへしと、訛傳せらるゝに對じ、五十年六十年以前には、日支兩國商人間に或はさる相違もありしならんとすること、氏の解答なることを先づ擧げ、引續き説いて曰く、數時代の間(數世紀の封建時代全般を通し)日本商人階級の地位は、社會上低きものとせられ農民よりも低く、土に比しては遙かに低かりき、商賈(單純なる金儲けの、業務全般をかく輕視せる結果、金儲け階級としての、商人階級間に於ける道德標準は、他の諸階級民間に、立てらるものに比し、低き程度に落込むこととなり、この事情は新時代の日本に至る迄、持續したるか、次いて一變化は惹起されたり、即ち西洋文明を究むるため、日本より歐米へ、最初に渡れる人々は、歸朝後日本の將來に於ける、繁榮及成功か、主として西洋諸國との商業に、立脚するの要あるを、國民に告げたり、されど

對外商工業を、打立つるの諸條件を、充たすためには、取引上の正直及體面につき、その標準を西洋に於けるものと、同等に高からしむるの要ありき、かくてかゝる標準は、如何にせば達成又維持され得へきかとの、問題は起されしか、此點に邪魔をなすものは、主として社會上に存すること、間もなく看取せられたり、詳言すれば社會的理想に、一變化を遂ぐるの要あり、商工業に従事し、實業及金融に與かる者は、最早社會的に、見下さるべきに非ず、是等の職業を、社會上尊敬せらるゝこと、最も薄き階級に、委ね去るべきに非ず、國民中最良にして、最も有能たり、尊敬せらるゝこと至りて厚き人々も、之に當るの要ありき。

その結果この種の一變化は、惹起され始めたり、性格及社會的地位上、最上の人々も、政府により激勵せられ、諸方面の實業及金融に、その注意を注ぎ初むること、益

益多きに至れり、現今日本の金融家、及大商工業を經營せる人々は、何れの國の實業界金融界にも、發見され得へきと同等に、高尚なる一人物型に屬すと、信すへき理由あるに似たり

と、かくて又日本に於ける一切の銀行は、日本人が不正直不信用にして、出納掛及支配人の如き、責任ある地位に据ゆるに、足らざるを以て、その代りに支那人を傭ふとの、馬鹿らしき訛傳、米人間に流付せらるゝことを擧げ、その訛傳を生むに至りし、根元の一事實を明かにすると共に、本邦銀行が二千三百以上を數ふるも、一つとして出納掛又は支配人に、支那人を傭ふものなきの、真相を指摘し、(之に關し稍々詳しく敘事は、新渡戸博士の *The Japanese Nation*, pp. 169-173 河上清氏の *Asia at the Door*, pp. 51-52 に、載せらるること引かる)更に又體面を重んじ、實直なるの風は、輒近産業界の人々、及一般上流社會に限らず、多數凡俗の間にありても、恰も一部米人間の風評に反して、治ねく行はるゝ所なりとし、之か

證據材料として、著者が本邦に於て、見聞經驗せる所を列舉せり、即ち或は日本に永住せる、一老牧師の僕婢日米比較觀上、本邦に有利なるを紹介し、或は歐洲旅館に於ける如く、荷物の見張りを、嚴にするの要なきを、語りし一友人の談話を掲げ、さては鐵道旅行中の一米婦人に對し、還し遅れし菓子代の釣り錢五錢を、電話により次驛にて届くるの、手續を取りし物賣子僧の話、牝鷄賣約後、その牝鷄か生みし卵を、當然買主に屬すとして、屢々鷄と共に届け來りし、子僧の話などを、書き連ねたり、引いて又是等子僧の正直と、學校に於ける道德教育との間に、多少の關係あるやを問ひ、特に我修身教育の神髓か、教育勅語に存することを擧げ、「爾臣民父母ニ孝ニ」とあるより以下、「義勇公ニ奉」すとある迄の翻譯文を載せ、歐米何れの國か、その學校に於て、之よりも一層良好又實踐的なる、道德系統を教ゆることやあると嘆稱し、又日本國民性中には、大なる理想的元素あり、その唯心主義、理想主義は惟ふに、そ

の美術中最も鮮明に現はるゝも、教育にも文學にも、その他幾多の仕方にてても、之を窺はしむと論し、本邦輓近の教育か、物質又は主智に流れ、理想及道德を忘れたりと、觀するを非としたり、吾人は近來社會の諸方面に、現はれ來りし諸醜聞に照し、右の如き樂觀的評論を下すこと、果して適切なるやを、疑ふ者なりと雖も、一部の評論として、かゝるものあることを記憶するも、亦無意味に非ず。著者は次に(一一)文明の一試金石として、戰爭の仕方俘虜の取扱方を擧げ、北清事件、日露及日獨戰爭の例を引き、本邦の採り來れる所を褒め、此等の點に就き、日本によりて行はれたる好模範か、最近の戰爭中歐洲諸國民により、踏襲されたりしならんには、戰爭の慘禍は如何計りか、和らけられしならんを評論せり。

次に(一二)文明の一目標としての、治を好むの民情に就きては、日本を以て好戰國民とするの風評、米國に蔓れるに拘はらず、日本國民の理想及その國民生活よりせば、過去數世紀の

間著しく泰平を好みたり、今日も亦然りとし、論して曰く

日本國民は過去二十五年間に、著しく戦へるは眞實なり、されどそは彼等の信するか如く、凡て直接間接に、自衛のためにせるものなり、就中大戰役たる日露戦争は、實にその存在を全うせんかために、之を賭するの外なしと、感ぜられつゝ戦はれし所なり、されどその以前の記録によると、長年月に亘り、全世界中最も平和なりし諸國の、一つとすへきは疑を容れず、否平和の最上國とすへきものあり、二百五十餘年の間、合衆國には印度人との諸戦争以外に、四回の戦亂あり、歐洲諸國民は交戦せること、殆んど數知れず、中には大仕掛けにして、最も殺伐なるものもありしと雖も、日本にありては全く戦亂なし、内外に亘り絶對に、治平を保ちたり、遙かに永き時代、即ち約千三百年間に亘りても、外國民と戦へるは、唯一回のみ、かく對外戦争なきを

得たるや、一は海上に孤立せるによるとは、正當に說かれ得べき所なるも、之を眞實に勘考するに拘はらず、その平和の記録は著し

と、かくて昔時國內の戦亂絶え間なかりし、時代もありしに拘はらず、徳川時代に於ける昌平は、西洋諸國の何れにも勝れるを説き、その論旨を敷衍して曰へり

西洋の自稱基督教國民は、自己と同等なる國際的權利を、日本に與ふことに同意し之を許して一等國の、仲間入せしむるに先たち、事實上之を驅りて自國のため、強大なる陸海軍を興さしめ、一軍國として怒るへきものあるを、示さしむること、せるは、自から基督教的と呼號せる、一文明にとりては、可笑しき變則の一なり、日本の教育、美術、産業、文明と、民族の智能とか、歐洲多數の國民間に、窺はるゝものに比し、古き所ありしとするも、何等役立つ所なかりき、先づ戦ふの力あることを、示

すの外なかりき、之を示し得て始めて、諸國は日本を公平に取扱ひ、之に同等の地位を、與ふることに同意せるも、その以前には然らざりき

と、引續き米國民を好治的、日本國民を好戰的と觀するは、事實に反するを指摘しつゝ、軍備費武器の發明等につき説く所あり、更に日本人の好治か、昔時に限らず、今も尙之に燃ゆるの證據として、有力なるものあるを説けり、吾人は治を好むの結果、端午節句に於ける武者人形迄も、一概に軍國の遺風なりとして、一蹴し去るか如き、一部評論家と日本文明觀を、同じうし得ざるを想ふ者なりと雖も、一面最近數十年間、好戰的なりし現代史に眩惑せられ、我邦を軍國又は軍閥の日本と、論斷するを以て、日本文明史の研究に忠なる者と思はす、此意味に於て、右 Sunderland の評論には、意義多しと考ふる者なり。(同一の論旨につきては、大正十年二月七日讀賣新聞社説「日鮮協會の發起」、并にその後同社説に對し、一外字新聞により加へられし、評論の反駁として、同紙上掲けら

れし數回の社説參照)次に氏は(一二)寛仁大度を以て、高尙なる文明の徴として挙げつゝ、日本國民は此徳を備ふるの、證左に富むことを説き、特に加州移民の排斥を、受くるの怨あるに拘はらず、大經費を投して、巴奈馬博覽會に協賛せるの事實あるを挙げたり。唯他の一標準に照して判斷せんか、日本文明を以て高からざるか如く、想はしむるものありとし、氏は次に(一四)婦人の地位を擧げたり、されど之に就きても、改善の域に向ひつゝことを附説し、女子教育の普及、婦人職業の増進等を數へ、附言して曰へり日本が西洋特に亞米利加と接觸せるは、國民をして婦人のために、新らしき一理想を懷かしむることに、預りて力ありしに似たり

と、然り我邦婦人界か、特に米國の影響を受けて、動かされつゝあるは事實なり、されど落ちて、行くべき理想か、此一影響によりてのみ、立てられ得へしと考ふるは、淺見たるべきことを想はすんは非ず、即ち此理想を立つるためには、

米國以外の西洋諸國に於ける婦人界、特に又東洋諸國殊に印度の婦人界を、一層博く參酌するの要あり、偶々近日 Mary Frances Bilington, Woman in India, '95 を一覽し、之を想ふことを深し。著者はその外(一五)文明の一頁目標としての、慈善を敷へ、赤十字社事業の普及に付、日米比較を試み、本邦の發達上見るべきものあるを説けり。最後に氏は(二六)宗教的寛恕を以て、文明の高きを測るの一標準視し、世界中何處を搜すも、日本國民間に於けるか如く、宗教的寛恕に富むものなきを賞揚し、今假りに彼我地を換へ、我佛教徒西域に入り、寺院學校を建て、基督教青年を引込みて、その宗旨に歸依せしめんと、布教に努むることありしとせんに、西洋諸國はその徒を遇するに當り、日本が現在基督教宣教師を、遇するか如く寛恕たり得へきかを疑ひ、引いて數年前我天皇陛下か、基督教徒經營の一病院に、五萬圓を下賜し玉ひし一事例を引き、合衆國大統領又は英王又は獨逸皇帝に、之に似たる雅量あり得へきやを反問せ

り、その外又東京に於ける、焼打事件起れるに際し、焼かれたる建物中に、基督教會もありしに、同市の重立ちたる佛教徒は、之か修繕費の三分の二を、提供せんことを申出でたるの、事實をも擧げて、宗教的寛恕上寧ろ、西洋に勝るものあることを説けり、此點につきても吾人は本邦教育評に關すると同様、氏の評論につき疑問あり、即ち明治時代以後に於ける國民か、基督教徒を遇すること、昔時切支丹宗門を遇せるか如く、酷薄ならざりしは、當に宗教的寛恕の反映としてのみ、見るべきに非ず、寧ろ一は國民の宗教的無關心又は無頓着を、徵表するの材料と、觀し得ざるに非るかとするは之なり。

以上 Sunderland 評論の梗概を紹介し、間々短評を挿み來れり、その間氏か「予の目的は、日本を無碍の一龜鑑 a paragon of perfection として、持上くるに非ず」として、説ける中にもかゝる一龜鑑視せるか如き、趣なしとせざるものあることを指摘したり、されは本邦民に、幾多の缺陷あるを認め、之を正觀しつゝ、之か

矯正に努むるの要ありとすへきや、氏の説を俟つ迄もなし、唯氏の評論は兎も角とし、氏が「吾人は凡て、隣人の諸缺點を、發くことゝなり易し、諸國民は他國民を評するに當り、自己を評するよりも、遙かに酷なり、人種の嫌惡には富めり、特に「白」人種か、多くの同情なく、從ひて又多くの理解なくして、他の諸人種を見下すことゝ、なり勝ちなる際には然り、彼等は間々極めて皮相的に、極めて盲昧又極めて殘酷なる、判斷を下す」とせるの論旨に對しては、邦人として多大の感謝を、表せずんば非るなり。